

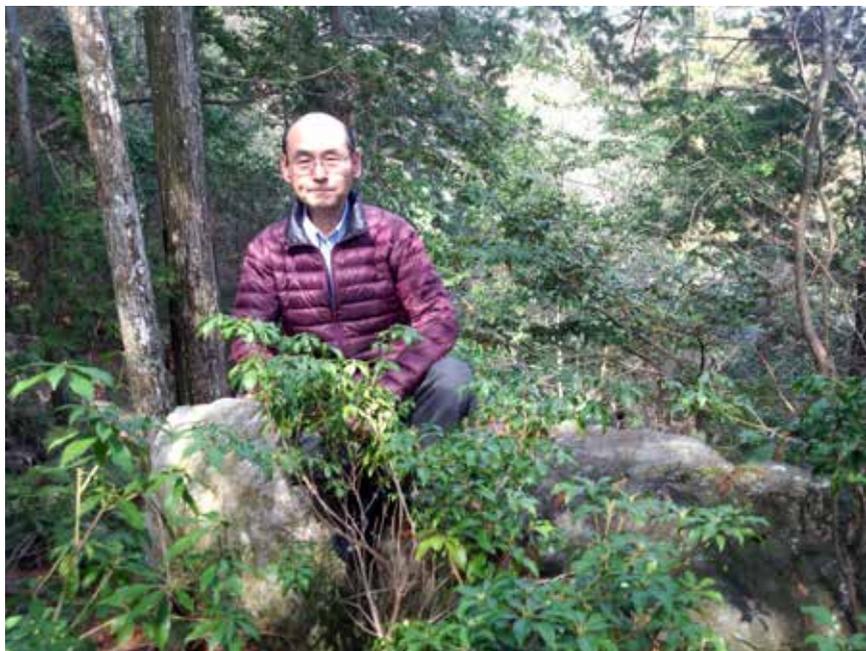
タイトル	人の「こえ」を聴く
著者	徳永, 良次; TOKUNAGA, Yoshitsugu
引用	年報新入文学(21): 2-10
発行日	2024-12-25

人の「こえ」を聴く

徳永 良次

高山寺展のこえ

二〇二四年七月九日から九月一日までの約五〇日間、北海道立近代美術館で「国宝鳥獣戯画 京都高山寺展 明恵上人と文化財の伝承」(以下、高山寺展)という展覧会が開催され、およそ8万人を超える入場者数を記録した。これは、単独の寺院・僧侶をテーマとした展覧会としては、記録に残るものと言える。教科書にも載っているという「鳥獣戯画」(鳥獣人物戯画)がお目当てなのはもちろん、「明恵上人の生きざまや、それにまつわる絵画、資料、さらに現代に至るまで明恵上人や高山寺を慕って集まった、多くの文化人の記録とその伝承について大変興味深かった」という感想が多かったという。



写真① 高山寺境内にある「座禪石」にて

私は、大学院生時代から約三十五年以上にわたり、高山寺典籍文書綜合調査団のメンバーとして調査に従事してきた。当初、専門の国語学（日本語学）に関連した資料の調査・分析ばかりに取り組んでいたが、次第に、それらが、いつ、誰によって、どのように、何のために保管・管理し整理されてきたかについて強く関心を持つこととなった。そうすると、現存する一万二千点以上とも言われる典籍文書の中に、鎌倉時代以降、現在に至る時々の人の「生きたあかし」とも言うべき生の記録・記事を見ることがある。その時々にかいついた記録は書き留めてみたりしていたが、近年、特に印象に残った記録をいくつか紹介していこうと思う。

明恵上人の「こえ」

高山寺中興の開祖である、明恵上人高弁の残した記録がある。この記録は、高山寺典籍文書綜合調査団が発行した『高山寺典籍文書目録第一』（東京大学出版会、一九七三年）には、すでに紹介されており、私も何度もその目録は利用していたので目にしていたのであるが、今夏、「高山寺展」で原本が展示されており、改めてじっくり目にする機会があり、非常に衝撃を受けたものである。その記録を紹介する。原文に読みやすく濁点、句読点を付した。



写真② 明恵上人修行の地からみた、紀州湯浅の海

華嚴一乗教分記卷上（高山寺聖教類第一部220「1」）一帖

〔奥書〕（成弁筆）／は改行を示す

哀哉、□（擦消）、南山ノキハニ船ノ一艘イデキタリツルガ、ホドナクハセトヨリ（馳通）テ北山ニカクレナム／トスル気色ヲミレバ、此耳キレ法師ガ一生涯ヲハセワタラムホドモ、アレニコトナラヌカナト思テ／雙眼ニナミダ（涙）ウカブ。筆ヲソメテ如此カキサシテマタ筆ヲソメムトスル便ニミヤリタレバ船ハ／ステニ北山ニハセカクレニケリ。弥（いよいよ）アハレヲモヨラスモノカナ

内容は、概略以下の通り。

和歌山の湯浅の海が見える庵でこの聖教で勉強していると、南から一艘の船がやって来て、すぐに北山に隠れつつある。これを見るに、この「耳キレ法師（明恵上人自身のこと）」の一生涯の短さと同じに思えて、両目に涙が浮かんでしまった。この事を書いているうちに、あつという間に船は北山に隠れてしまって、いよいよ寂しく悲しい気持ちになってしまった。

やや長文の紹介になったが、この文章は、写本の末尾に書かれる「奥書（おくがき）」の部分に、明恵上人（当時、成弁と称していた）が漢字片仮名交りで書き残したものである。この記事の後には、通常の奥書として記載される、「建久八年・・・」という年紀があり、一一九七年の書写とされる。写真②に掲載したような、紀州湯浅で、上人が少数の同行者とともに小さな僧庵でひたすら仏道修行を行っていた若い頃の記録である。

明恵上人は、これを書いた数年前に、仏道修行に専心することを誓い、「仏眼仏母像」の前で自ら右耳を切り落とし、痛みを堪えていると空中から文殊菩薩が現れたという逸話が知られており、この後、しばしば自分を「耳キレ法師」や「无（無）耳法師」と書き残している。修行中に、眼前に広がる海を走る船を自分の人生に重ね合わせ、果てしない修行とそれに比して人生の短さを嘆く、という明恵上人の心情が思わずあふれ出てしまい、ここに書き付けないではいられなかったのであろう。

次の資料に見える記事も、明恵上人の溢れる思いが伝わるものである。

大唐天竺三里程書（高山寺重書類 10） 一幅

（前半省略）

印度ハ仏生国也、依恋慕之思難抑、為遊意計之、哀々マイラバヤ

（以下、略）

明恵上人は釈迦に深く帰依しており、釈迦と同時代に生まれなかった事を常々残念に思い、せめて自ら釈迦の遺跡を訪ねたいという思いを抱いていた。この資料は鎌倉時代元久元年（一二〇四年）ころに天竺行きを計画しており、結果的には二回渡航を企て、その度に春日明神の宣託などで中止せざるをえなかった時のものである。

唐の都、長安を出発して、一日にどのくらい進めば天竺・王舎城に到着するかを三パターンの行程で

計算したものである。この途中に、明恵上人の印度への思い、釈迦への思慕があふれ出して、先のような文章が「突然」書き記されている。冷静に距離と日数を計算しているうちに、「ああ、どうしても印度に行きたいものだ」と思わずあふれ出る感情の豊かさがよくあらわれているものであろう。

これとは別に、本来書く必要のない表現を使う記録も見える。

五教章中巻指事末（高山寺聖教類第一部293〔2〕）一帖

（裏表紙見返）

當山第一之非人成弁

之本也

當寺之瓦礫明恵房

此山之厠掃治之大法師

之本

この部分には、通常、書写奥書（いつ、誰が、何を、どのように書き写したとかの情報）を記載する。しかし、それ以外に明恵上人は、自分を「第一之非人」、「當（当）寺之瓦礫」、「厠掃治之大法師」とまで書き残している、これほど自分を卑下した、その思いはどのようなものであっただろうと、考えさせられることが多くなった。

弟子達の「こえ」

以上のような明恵上人の記録以外にも、膨大な現存資料群には、興味深く、かつ、人の生きざまを考
えさせられる記録が見つかる。以下、いくつか紹介していく。

梵網経記巻下（高山寺聖教類第二部26〔2〕）一帖

（奥書）

寛喜二年十二月十六日病後励力両卷（↓①）

（中略）新発心僧空弁四十七

同廿一日一交了

同三年辛卯正月十一日於禅河院御庵室御披讀其（↓②）

次依御命加点了聴聞衆同上卷矣 空弁記之四十八歳

自同三日始至今日首尾九箇日被終其功而已

（別筆）

同正月廿四日病中右筆仰苦痛再治点了

懇念惟深三宝必証明矣 空弁重記之今度病／決定死／病也（↓③）

これは、私が、禅浄房（空弁）という僧侶の事績について網羅的に検討していた際に見つけ出した奥

書である。禅浄房は、高山寺草創期、まだ、明恵上人が存命の頃から上人に従って高山寺において修行していた僧侶であるが、ほとんど記録が残されておらず、その存在は忘れ去られていた。

しかし、調査していく内に、禅浄房は現在で言う「図書館長」のような存在として、高山寺にあった膨大な聖教の保管と管理を担っていたことが明らかとなってきた。そのような重要な立場にありながら、明恵上人より早く示寂（亡くなること）したようで、右にあげた奥書がその最後の記録となった。寛喜三年は一二三一年で、明恵上人は寛喜四年（一二三二年）の示寂であるので、それより一年早くこの世を去ったのである。その禅浄房が残した最後の記録には、死と向かい合いながらも淡々と仏道修行に邁進している思いが綴られている。この最後の記録を時系列的に見ていくと、寛喜二年十二月に「病後」にもかかわらず、心を奮い立たせて経典を書写し（①部分）、翌年正月には九日間掛けて、上人の命で梵網経の講義を行い、合わせて経典に訓点を加点了（②部分）。そして、正月の二十四日に、その経典にさらに加點や修正を施した（③部分）のであるが、「病中、苦痛」の中の作業であり、ついには「この度の病は死病である」と自身が書き残している。それに呼応するように、禅浄房に関する記録は寛喜三年以降、まったく見られなくなっている。

禅浄房没後、高山寺の聖教類は、鎌倉時代中期以降に大規模な編成替えがあり、その状態は少なくとも江戸時代末期までは続いていることが知られている。

最後に、江戸時代書写の典籍に書き付けられた和歌を紹介する。書き付けた人物については不明であるが、明恵上人に関する伝記類を写し取った典籍の裏表紙に書かれている。

やまのはに かげかたむきて くやしきは むなしくすぎし つきひなりけり

〔上人記〕一冊 高山寺聖教類第四部一四八函9)

つきないおもい

「鳥獣戯画」が伝来したこと、また、日本のお茶栽培発祥の地ともされる高山寺には、一般の人は知らない膨大な典籍文書が現存しており、それらは明恵上人とその弟子達による収集や書写しただけではなく、明恵教団を崇敬する貴人が寄進したものである。現在残っているのは、幾多の自然災害や戦乱、盗難などを乗りこえた長距離ランナーであり、これからも可能な限り走り続けていくものである。私は、当初は日本語（史）資料の宝庫として、まさにその学問上の観点から高山寺とその典籍を見てきたのであるが、いつしか自分自身が「鳥影に消えつつある船」や「むなしく過ぎし月日」を感じるうちに、これら先人の書き残した、あふれる思いに大きく共感することとなった。

いつの時代も「人生は短く、術は長し」「人生は短く時は過ぎ去る」である。

